

## 教員養成の転換期に直面して

スポーツ健康科学部学部長

村松常司

平成 31 年の教員免許法改定を目前に控え、現在、日本の教員養成は大きな転換期を迎えています。それに伴って教職課程を持つ各大学は平成 30 年に再課程認定審査を受けねばなりません。これまでは「教職に関する科目」と「教科に関する科目」は別けて審査されていましたが、新しい教職課程の審査では「教職に関する科目」と「教科に関する科目」が一つになり、専門科目の「教科に関する科目」の内容に教職教育の強化がより求められるようになりました。具体的には、専門科目の教育担当者に教科教育に関する研究業績が求められるようになったことです。

大学教員の授業に対する熱意、態度、教育力には大きな個人差がありますが、近年、授業を行う力（教育力）を持つことがより大切になってきました。大学設置基準では、「研究上の業績を有する者」、「専攻分野について特に優れた知識及び経験を有する者」などを対象に、「大学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力を有する者」とされており、教育上の能力については一切触れておらず、大学の裁量に委ねられていました。今日の学生の価値観、気質、能力は社会の変化とともに大きく変化してきていることは周知の事実であります。従って、大学教員自身が学生であった数十年前のスタイルの教育内容や教育方法で授業を行っても、大きく変化した現代学生にはいままでの授業法（講義型授業等）だけでは通用しないと考える方がよいと思います。それ故、学生の価値観、気質、能力に見合った指導力の再開発が求められます。教育指導能力をどうどのように捉えるかはっきりしたものではありません。今のところ、授業研究を行って多くの知見を積み重ねていくしかないと考えます。

講義型授業には多くの問題点が指摘されています。大学教員なら、クラス全員が良い出席率で、私語もなく、居眠りもせず、熱心に授業に参加してくれることを願っています。しかし、現実はこの逆で、この傾向はどんどんひどくなっているという報告も見受けられます。私自身の授業もこの例にもれず反省の日々で、試行錯誤を繰り返しています。ではどうしたら望ましい授業に近づけることができるのでしょうか。加藤は、大学生の講義における着席位置と成績について考察を行っています。それによると、前方着席学生は中央・後方着席学生より成績が良く、「配布資料の役立ち具合」、「教員の熱意」など全ての項目で後方着席学生の方が厳しい評価を下していることを報告しています。

講義型授業が依然として大学での授業としては重要な位置を占めていることは否定できないところでもあります。しかし、その効果を考えると、加藤は以下の 2 点に留意する必要があるとしています。一つは、教授内容と教授方法が合っているかの検討。講義が良いのか、演

習がいいのか、目的と手段の整合性の検討であります。今一つは、授業に学生を巻き込むこと。仮に講義型が効果的と判断できた場合でも、学生のモチベーションや参加度を考え、全員は無理にしても、多くの学生を巻き込んでいく仕組みや工夫を検討することであるとしています。多くの実践報告に触れ、教員の資質や学生のタイプ、教える内容に合わせた独自の授業開発が今後求められるとしています。

平成 29 年度のスポーツ健康科学部教育研究紀要第 3 号に 18 編の教育研究論文を掲載することができました。投稿していただいた先生方ならびに編集委員の先生方に御礼申し上げます。学校教育法では、大学の使命は「教育、研究、地域貢献」であることが明示されています。学術的研究は勿論のこと、授業における教育研究も積み重ねて行くことが責務と考えます。今後さらに授業研究を積み重ね、その成果をスポーツ健康科学部の教育研究紀要に掲載することで教員相互の切磋琢磨を希望致します。

#### <参考文献>

- ・ 西村拓生 (2016) : 教員養成の激変に直面して, 奈良女子大学, 教育研究開発センター, ニュースレター, 1-4
- ・ 井端正臣 (2011) : 大学教員に求められる教育指導能力, 私立大学情報教育協会
- ・ 加藤典子 (2004) : 現代大学生の教室で座る位置, 東京工芸大学工学部紀要, 27(2), 90-99